In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	振る舞いの政治性 : 障害者のお笑い表現をどう考えるか
Author	藤原, 温士
Citation	表現文化. 8巻, p.26-49.
Issue Date	2014-03
ISSN	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学研究科表現文化学教室
Description	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

振る舞いの政治性
～障害者のお笑い表現をどう考えるか～

藤 原　 温 士

ここに掲載するのは、「振る舞いの政治性」という観点から障害者のお笑い芸人たちの表現を考察し、2012 年度文学研究科修士論文の優秀作に選ばれた藤原くんの論文の縮約である。

第 1 章では、笑いにかんする三大理論の、当該表現を分析するさいの有効性が吟味されたうえで、バフチンの援用によりそれらの政治性が明るみに出される。つまり、三大理論は狭い風刺的な笑いのみを題材にするあまり、主従を転倒させる民衆の笑いを無視したというのである。そのあとバフチン理論の妥当性と限界とが論じられる。第 2 章では、障害者のお笑い表現が「非政治的な」アール・ブリュットや宮廷道化と比較される（紙幅の都合上、ここでは省略されている）。第 3 章ではホーキング青山、脳性マヒブラザーズ、それに鳥居みゆきが取上げられ、障害への態度、政治性にたいする自覚の程度、葛藤、変容などの観点から丁寧に論じられてゆく。それを通じて浮上するのは、問題の複雑さそれじたいである。

先行研究が皆無に近いなかで記された本論文の価値はとても高い。書くことが発見につながるような、思考の軌跡をそのまま映しだす文章もまたすばらしい。政治性という言葉に寄りかかりすぎて、もっと明快な意味づけが欲しいところや、みずからのおびる政治性への羞恥心（？）が筆を慎重にしすぎる箇所がないわけではないけれど、それは本論文の価値をいささかも損なうものではない。このテーマは広大な研究領域と接続している。藤原くんには今後も研究を継続し深化させてもらいたいものである。

ところで最近、私は『統合失調症がやってきた』（イースト・プレス、2013）という本を読んだ。漫才コンビ松本ハウスの芸人で表題の病気を患っているハウス加賀谷の、発症から入院生活、それに活動の復活にいたる顛末記である（相方の松本キックも一章分を書いている）。深刻でありながらユーモアにみちたこの本を読了後に彼らの「統合失調症」ネタを動画で見てみたが、かなりおもしろい。藤原くんは彼らのお笑いをどう位置づけるだろうか。（野末紀之）

序論

本論では振る舞いの政治性という観点から、障害者のお笑い表現に関する考察を進めていく。お笑い表現に限ったことではないが、障害者と笑いとの組み合わせを見るや否や、すぐさまポジティブな反応とネガティブな反応の両方が返ってくる。ポジティブなものは、笑いによって苦しいことを乗り越えようとか、笑いをリハビリテーションに取り入れようといったもので、医学的な見地から指摘されている笑いの効用を障害者にも広めようという論調のものだ。一方、ネガティブなものは、障害者を笑いの対象にするのは非人道的であるとか、必死に生きている障害者を笑いの題材にするのは不謹慎であるといったもので、道徳的な視点から主張されるものだ。アカデミックな文脈においてもこれは同じことであり、笑いによる障害者のケアを考える福祉学的な研究がある一方で、障害者差別を社会問題として研究しようという動きもある。

結論から述べるならば、これらの先行研究は本論にとってほとんど何の役にも立たないものである。本論の副題でもある障害者のお笑い表現を上で挙げたような文脈に置いて考えたとしても、新しい発見は何も得られないばかりか、視野を狭めてしまうばかりだろう。というのも、それらの先行研究は本論の主題である振る舞いの政治性をまったく意識していないからだ。

では、本論の最も重要な要素である政治性とは一体どういったものであろうか。もちろん、本論が主たる対象としているのはお笑い表現にまつわる政治性であるため、選挙や政党政治の問題とは無関係である。劇作家の飯沢匡は『武器としての笑い』[1]の中において、諷刺や権力への反抗といったお笑い表現の政治性を何度も強調しているが、これはあくまでも笑いの持つ権力への反抗、価値観の転倒という部分のみに着目した狭義の政治性であるため、本論が扱う広義の政治性とは異なるものである。

ならば、広義の政治性とは一体どういうものだろうか。簡潔に述べるな

らば、個人的なことが政治的なことである、と言われるときの政治性のことである。詳しく述べるならば、この場合の政治とは「広い意味での社会的な権力関係、その力学のこと」である。我々は「無人島に生まれ落ちるわけではないから、つねに、そしてすでになんらかの力関係を帯びた社会の中に生まれ」ているため、「行うこと、語ることそのすべてがその時々の権力関係に規定されている」と言える。それゆえに、社会的階級、ジェンダー、言語、文化、セクシュアリティなどの個人的なことが政治性を持っていると考えられるのだ。[2] 以上のことからもわかるように、広義の政治性とは日常的なものである。それゆえに、意識されずに見逃されてしまうという側面を持っていることに留意しなければならない。また、その時々の関係性によって変化していく可能性を帯びているものでもある。本論では、他者への影響力は持ちつつも、変革や抵抗によって変化しうる権力関係のことを広義の政治として定義しておく。

　広義の政治に関する定義が済んだので、そろそろ本論で取り扱う障害者のおかれている状況についても説明する必要があるだろう。健常者に比べて少数派である（とされている）障害者は、歴史的にも差別を受けてきた存在であることは間違いない。共同体において一人分として期待されるほどの仕事量をこなせないことも差別の原因にはなっただろうが、律令制が整備され始めた頃から、健常者に比べて労働力が明らかに劣っていると思われるものには減税などの救済措置が行われていたようなので、[3] 労働能力自体はそれほど大きな差別の原因にはならなかったと考えられる。それでは、一体何が障害者の差別の原因となっていたのだろうか。たくさんの原因が考えられるが、その 1 つとして仏教思想が挙げられるだろう。もちろん、福祉的な思想から病人や障害者を保護するための悲田院などの施設も仏教思想によるものであるため、仏教思想のすべてが問題であるとは言えない。しかし、病気や障害は仏罰であり、前世の因縁によるものであるという考えのために、現世においてその責任を追及されるというかたちで迫害されるケースもあったこともまた事実である。[4]

今日の障害者差別もこういった歴史的な背景の延長上にあるのではないだろうか。現代社会においても仏教思想が原因である差別が横行している、と言いたいわけではない。ここで主張したいのは、知らず知らず、それを当たり前だと思い込んでいる価値観による差別が行われているのではないか、ということだ。障害者は健常者と同じことはできない、という認識は正しいと思われる一方で、間違っている部分もあるのではないだろうか。障害者差別というと、実際にどういった不利益を被っているかという面ばかり注目されるものの、最も問題視されるべきは、健常者から障害者へと特定の考えを押し付けているところではないだろうか。その結果、本来ならば障害者が自分で獲得すべきアイデンティティを健常者が中心である社会から押し付けられ、障害者の側がそれを内面化してしまうという事態が生じているのだ。[5] このとき、健常者は必ずしも悪意があってそういった行動をしているわけではないだろうが、一方的に障害者を規定するような振る舞いをして、無意識の政治性によって障害者を萎縮させているのは間違いない。障害者とそのお笑い表現について考えていくためには、健常者の持っている政治性によって見えにくくなっている、障害者を取り巻く状況を理解していなければならない。

ここからわかることがある。我々は広義の政治性によって物事を判断しているのだが、無意識に受け取ってしまっている権力関係の存在そのものに気付かない恐れがある、ということだ。本論では常にこのことを心掛けて、健常者の政治性だけではなく、障害者の政治性にも寄り添いながら考察を進め、障害者のお笑い表現の特殊性や独自性を分析するための理論を確立することを目指したい。

1. 先行研究

三大理論の援用

三大理論は笑いに関する研究を整理する研究者たちによって提唱されているもので、現代の笑いに関する研究では頻繁に参照されるものである。[6]

三大理論はどれも笑いという現象の原因を説明しており、何故そこに笑いが生じたのかを明らかにしようとするものである。また、そのメカニズムを応用して、どうして笑いが生じなかったのかということも明らかにすることもできるだろう。

具体例として、第 2 章で詳しく取り上げる脳性マヒブラザーズ 7 のコント「お医者さん」について考えてみたい。このコントは医者に扮した周佐が患者役の DAIGO を診察室に招き入れるところから始まる。医者役の周佐は脳性マヒの影響でうまく歩くことができないため、彼が車椅子に乗っているというのも観客の注目を集めるが、間もなく舞台に登場する DAIGO のほうに観客はより目を奪われるだろう。周佐ほどではないにしろ DAIGO も足へと脳性マヒの影響が出ているため、健常者のようにはまっすぐ歩けないからだ。そのよろめくような歩き方を見た観客は、その脳性マヒブラザーズというコンビ名から予想していたとはいえ、舞台上に障害者が現れたことに対して身構えてしまうのだが、このときすでに笑いが生じるための条件は揃っていると言える。ここで観客に生じている緊張感が解消されたとき、そこに笑いが生じることはハーバート・スペンサー（Herbert Spenser）やジークムント・フロイト（Sigmund Freud）の解放理論から説明できることである。[8][9]

続く展開として、周佐の目の前の椅子に腰掛けた DAIGO は「どうされました？」と医者と患者という設定に忠実な問いかけを受け、これに対して「体調が悪くて（中略）風邪だと思うんです」と応える。この後、いくつかの問答が繰り返され、患者 DAIGO にどういった症状なのかをカウンセリングした医者役の周佐は「風邪ではなくて脳性マヒです」とはっきりと言い放つ。ここで観客の緊張感が解き放たれて笑いが生じるわけだが、そのメカニズムは以下の通りである。舞台上の DAIGO に対する観客の態度からも明らかなように、普段の我々は障害者を気遣うあまり、遠ざけてしまうことがある。そしてそうだと認識していながら、相手を障害者扱いすることまでも避けようとする傾向があり、障害者に対して「あなたは障害者ですね」とはっきりと言うことは、日常的にほとんど起

こりえないと言える。そのため、普段障害者に接することの少ない観客は、舞台上のDAIGOに対してどういった態度を取るべきわからずに困惑してしまい、自然と緊張感を高めていく。そこで周佐がDAIGOに対して何の遠慮もなく「脳性マヒですね」と言い放ったとき、観客の緊張は一気に解放されて笑いとして表出するのである。もしくは、「まさか障害者に対して『障害者ですね』とはっきりと言うことはないだろう」という無意識の判断と周佐の台詞の差異によって笑ったと不一致理論でも説明できるだろう。[10]

別の例を挙げてみよう。ホーキング青山は自身も障害者でありながら、障害者を題材にした漫談をすることで有名であり、中でも障害者の性事情に言及するお笑い表現は彼独自のものと言えるほど珍しいものである。彼はその漫談において、「障害者の中にもずるい奴がいて、女性を相手に自分と体の関係を持てないのは障害者に対する差別意識があるからだと脅すようなやつがいる」という幾重にも複雑な問題が絡まりあった、障害者にまつわる問題の暗部を暴露するような内容を口にする。ここで観客たちは重苦しい雰囲気に包まれ、これからしばらくは続くであろうネガティブな内容の話の展開を予測し始めるのだが、ホーキング青山はそれを裏切るように、きわめて明るい口調で「その手段を今度オレも使おうと思います」とにこやか言い放つのだ。その瞬間、観客が想像していた展開と実際のホーキング青山の発言との不一致によって大きな笑いが生み出されるだろう。

これらの例から、障害者のお笑い表現であっても三大理論によって考察を加えることが可能であると示せたのではないだろうか。

理論に含まれる政治性

理論に政治性が含まれているのは至極当然であり、今更それを指摘したところで何ら有益なことはないように思われる。しかし、理論に含まれる政治性が、特定の言説を避けていたり、理論を援用する過程において全く考慮されていなかったりする場合には、その政治性を指摘する価値が十分

にあるのではないだろうか。これまでの研究では指摘されてこなかったものの、いわゆる三大理論にも政治性が含まれていると言える。

もちろん、本論もそういった問題と無関係ではない。先行研究を批判し、自身の考えを述べている以上、そこに生じる権力の力学によって政治的にならざるをえないからだ。本論に関しては、テーマとして扱っている障害者が他者の視線という権力に晒され続けているために政治的になってしまうという事情もあるが、理論に政治性が含まれていること自体が問題なのではない。避けようのない政治性に対して無関心であることが問題なのだ。では、本論に含まれている政治性に関してどのように考えればいいのだろうか。この問題については結論にて詳しく述べることにする。

2. 障害者のお笑い表現の分析

本章では障害者のお笑い表現の分析を、その政治性を考慮しながら進めていく。本論の目的は障害者のお笑い表現が面白いか否かを示すことではない。障害者のお笑い表現の中には、人によってはあまり笑うことができないものもあるだろう。もちろん、普遍的に面白いものがこの世の中には存在してないというのも理由の 1 つだが、それ以上に政治性が関与していることが原因であると考えられる。演じているのが障害者であること、もしくは障害者が演じることは、健常者にとってはかなり政治的な意味合いを持ってしまう振る舞いである。障害者のお笑い表現を見たとき、マスコミの作り上げた障害者ドキュメンタリーなどから得られる一面的な見方によって理解することで感動する人々がいる一方で、かたちはどうであれ障害者が笑いに関わる文脈に登場することに不快感を抱く人々も当然存在する。その結果、そのお笑い表現が笑えないというだけでなく、不謹慎だと声高に主張する人も少なからず現れてしまう。障害者に関する笑いをすべて「穢れ」のように扱ってしまっている人々からすると、そこに「穢れ」との接触があること自体が問題視されるため、実際にどれくらい差別的であるか否かは見逃されてしまうことも多い。[11] こういった訴えをするのは、

道徳的な個人であったり、障害者支援団体の人々であったり、障害者本人たちであったり様々である。これだけ広範囲に大きな反応を引き起こしてしまうのは、障害者がそういった場所に出てくること自体が政治的な振る舞いだと捉えられてしまうからだ。それは意図的に選択された芸人による戦略である場合もあれば、芸人の側にその意図がなくても観客が政治的に読み取ってしまう場合もある。そのどちらでもない政治的な判断が留保された状況にともなった戸惑いを投げかけるという場合もあるだろう。以下ではそれぞれの例にあてはまる芸人を紹介し、そのお笑い表現の政治性を分析することで、障害者のお笑い表現の特殊性や独自性を分析するための理論を確立する一助としたい。

ホーキング青山

ホーキング青山（以下､ホーキングと略記）は本名を青山世多加といい、1994 年 6 月に大川興業主催で行われた若手芸人コンテスト『すっとこどっこい』がきっかけとなり、「史上初の身体障害者のお笑い芸人」「日本初の車椅子芸人」としてデビューした人物である。先天性多発性関節拘縮症という障害のため、生まれつき両手両足を使うことができず、電動車椅子で生活しながら芸能活動を行っている。[12] 芸風としてはブラックユーモアを交えた漫談を主なものとしており、近年の活動では落語や講談に挑戦するなどしている。また、自ら C-1（クレイジーワン）グランプリといったイベントを開催するなどの活動にも精を出しているようだ。[13]

ホーキングがお笑い芸人として最も特徴的だと考えられるのは、障害者という立ち位置がお笑い芸人にとっては個性となることに自覚的である点だろう。[14] 同じく両手両足の使えない障害者であり『五体不満足』[15] などの著書で有名になった乙武洋匡を笑いの題材に用いたり、自身が養護学校時代に目の当たりにした出来事を話したり、障害者の性について語ったりするといったことを繰り返していることから、障害を個性としてお笑い表現に活かそうとしているのがわかるだろう。例えば、時期として自分よりも後からマスメディアへの露出を増やした乙武に対して､ホーキングが｢め

ちゃくちゃ売れてるから足を引っ張ってやろうと思ったら（乙武には）足がなかった」というジョークを言ったとき、観客は緊張が緩和されて笑うのではないだろうか。この場面における緊張とは、障害者を笑いの題材にすることから生じるもので、フロイト的に禁則を破ったことによる快楽から生じた笑いということもできるだろう。また、足を引っ張ると言ったホーキングが両手とも使うことができないため、主張する内容と実際のホーキングの姿から予想される達成不可能性との不一致によっても笑いに説明を与えることができるだろう。

こういったジョークを繰り返すホーキングの姿勢は、健常者のお笑い芸人が身体的な特徴（頭髪が薄い、太っている、不細工など）を笑いの題材にすることと同じなのだろうか。もしホーキングが無頓着にこういった戦略を取っているのであれば同じだと言えるかもしれないが、実際にはそうではなく、彼は自分が障害者であるがゆえに避けがたく持ってしまう政治性を自覚しているようだ。[16]彼は自分の振る舞いを政治性という言葉によって説明しているわけではないが、健常者との差異から生まれる権力作用を繰り返し強調していることから、政治性に自覚的であったと考えられる。

ホーキングは漫談などをする際、障害者を題材することを戦略的に行なっている。もちろん、健常者のお笑い芸人も障害者を題材にすることは不可能ではないものの、道徳的な反発が起こってしまうため、テーマとしてはむしろ避けられがちである。そこで、その題材を使えるのが自分しかいないならばやってやろう、というつもりだったようだ。しかし、これはやや消極的な理由から選択したことらしく、大川総裁に勧められるままになんとなくお笑い芸人になってしまったために何をすればいいのか分からなかったときに取った苦肉の策だと本人は語っている。[17]そのため、ホーキングは障害者芸人という物珍しさから仕事がなくなることはなかったものの、その場しのぎの毒舌ネタを繰返すばかりで、お笑い表現に真摯に向き合えていないことに後ろめたさを感じていたようだ。[18]しかし、次節で述べるように、健常者と同じようにお笑い表現を行なっても、障害者が演じることによる政治性が邪魔となり正当に評価されない可能性があること

は、障害者にまつわる政治性を意識していたホーキングは当然理解していただろう。だが、彼はその政治性の問題に取り組むよりも、お笑い芸人としてお笑い表現に向き合うことに関心があったようだ。

ホーキングは近年『メジャー化計画』と称して、勉強会を兼ねる月例ライブを行いながら先輩芸人のライブに足を運ぶなかで、自分のお笑い表現を批評してもらい、改善点を見つけるという下積みのような生活を送っているという。[19] その中でホーキングが熱心に取り込んでいるのが落語と講談である。障害者とそのお笑い表現に付きまとう政治性を自覚しているホーキングが、自分の武器となる障害者ネタを捨ててまで伝統的なお笑い表現を選択したのは何故だろうか。結論から言うならば、観客が持つ解釈の自由をある程度奪うためである。ホーキングが以前に行なっていた漫談や後述する脳性マヒブラザーズのようなコントには、芸能としての型が存在しない。そのため、創作や表現を自由に行なうことができるので、かなり幅広いお笑い表現だと言える。だが、ルールによって規定されていないそれは、自由な表現であると同時に、観客の側にも自由に鑑賞され、解釈される側面も持ち合わせている。その結果、お笑い表現そのものよりも、健常者の政治的視線によって「障害者が頑張っている」といった部分ばかりが注目され、道徳的な文脈で読まれてしまうことも当然起こりうることである。ホーキングはこの点を十分に考慮していたため、落語や講談という型のあるお笑い表現を選択したのだ。

落語や講談の中にも噺家本人によって創作されたものもあるが、基本的には古くから受け継がれてきたものであり、観客も話の内容を知っていることが多いだろう。それぞれ型のある芸能であるため、観客の意識や注目は当然、その型の修練度に向かうこととなる。つまり、落語や講談をやる際には、観客の意識は演じているのが障害者であることへと向けられにくくなるのだ。もちろん、健常者の噺家と比べると、両手両足の使えないホーキングのほうが身振りを交えた表現ができないぶんだけ見劣りすることは事実であろうし、その際にはホーキングが障害者であることは観客に否応なく意識されてしまうだろう。だが、ある程度は障害者という要素へと意

識が向けられにくくなることはたしかである。ホーキングは、障害者に付随する政治性を自覚したうえで、健常者の注目する軸をずらすことによって、その政治性から逃れられるようなお笑い表現を行なっているのである。

そうまでして彼が自身の政治性を取り除こうと試みるのは何故だろうか。お笑いに真剣に向き合おうという目的から安易な障害者ネタをやめて落語や講談をやるようになった結果、偶然にも政治性から遠ざかることになったという側面もあるだろう。しかし、お笑い芸人にとっては、それ以上にお笑い表現と政治性が結びついたときに起こりうる厄介な事態がある。上でも述べたように、お笑い表現に含まれている政治性ゆえに道徳的な文脈で解釈されてしまい、笑わせるためのものに感動されてしまうという事態がそれである。ホーキングは、観客を笑わせるために切磋琢磨しているお笑い芸人にとって致命的なこの事態を想定していたのではないだろうか。

脳性マヒブラザーズ

一方で、脳性マヒブラザーズはこれにやや無自覚であったためにジレンマを抱えている。脳性マヒブラザーズ（以下、脳ブラと表記）はそのコンビ名が示しているように、脳性マヒという障害を持っている男性 2 人によって 2005 年に結成されたお笑いコンビである。同じ脳性マヒという障害でもそれぞれが抱えている症状は全く異なっており、周佐則雄は歩行障害があり車椅子に乗っているために動きに制限がある。その相方である DAIGO は言語障害があるために流暢に喋ることができず、何を言っているのかも聞き取りづらいほどである。こうした彼らの抱えているハンディキャップが社会生活を送るうえでの足枷になることは想像に難くないが、お笑い芸人としてもかなり不利に働くことを見逃してはならない。例えば、周佐は健常者のように歩き回ってコミカルな動きで観客を笑わせるという手法を取り入れることは難しいだろうし、DAIGO は肝心のボケが聞き取ってもらえないことも多いだろう。これはほんの一例にすぎないが、健常者の芸人と比べて身体表現の制限が多いことは確かである。もちろん、健常

者芸人の中にも身体能力の差があり、それぞれの芸人にもできる・できない、得意・不得意があるため、健常者と障害者の間にある差を一概に身体表現の制限として特別視すべきではないという意見もあることだろう。しかし、ここで問題となるのは脳ブラが抱える身体能力の差そのものではなく、そこに付随する政治性なのだ。たしかに、身体能力の違いに関しては健常者も障害者も個人によってできることが異なるといった尺度で語ることができるだろう。けれども、何らかの差や違和感があることを観客が発見したとき、つまり演じる側に障害があると気付いた瞬間に障害者と健常者という権力関係が見出されるため、そのお笑い表現は政治性を帯びてしまう。演じる側が政治性をいくら避けようとしても、障害者がお笑い表現を行なえば、何らかの政治性が観客から付与されてしまうものなのだ。[20] このことに非常に自覚的であったのがホーキング青山であったことは前節で述べたことである。

脳ブラは C-1 グランプリに参加した際、ホーキング青山に憧れてお笑い芸人になったと本人に言っていたようだが、それにも関わらず、ホーキングと脳ブラでは自身に付きまとう政治性をどう捉えているかが正反対であることは非常に興味深い。ホーキングは自分の障害を個性としてお笑い表現の武器とする一方で、それが生み出す数々の政治的問題に対してかなり冷静に対応している。ホーキングのほうが芸暦が長く、その間に何度も失敗をした経験から、障害者に接する人々がどういった政治性を抱いているのかを考え抜いたことによってそういった冷静さを獲得したのだろう。自分の笑いにどういったニーズがあり、観客がどういったものを求めているのかを分析する能力の一端は、その著作からも窺うことができる。[21] 少し長くなるがその部分を引用してみよう。

> で、こういうところで聞かれるのは決まって乙武氏の悪口。(中略)これがまた、いろんなところでよくウケる。
>
> ウケる理由はいたって簡単で、乙武洋匡という人間を世間は受け入れたが、それでもまだ ” 障害者だから ” という理由で腫れ物に触る

ような感覚がある。その腫れ物に触る感覚になんとなくフラストレーションが溜まっていたのだろう。そんなフラストレーションもわかるし、オレの場合なにより乙武氏と同じで障害者だから、腫れ物に触るような感覚がいらないため、結局、乙武氏の悪口はオレの専売特許のようになった。

物事にはなんでも裏と表があるというか、乙武氏という人間を世の中が受け入れたということは、同時に彼を拒みたがる”アンチ乙武”が出てくるのがまた世の中であって、そんな”アンチ乙武”のニーズとオレの存在がうまく合ったということだ。

オレはとにかく必死になって乙武氏の悪口を作り続けたが、オレをヨイショするつもりで、乙武氏のことを「たいしたことない」とかいう悪口を聞かされると、いつも「本質が分かってないなあ」と冷めて聞いていたもんだ。

ここでホーキングが冷静に自身を分析していることを前節に引き続き持ち出したのは、脳ブラの政治性への無自覚さを強調するためである。脳ブラは彼ら自身の障害を武器として使いながらも、実際の自分たちと、メディアの作り出した感動する対象としての「頑張る障害者像」とのギャップに苦しんでいるようだ。[22] 彼らが他のコンビとの合同ライブに参加した際に観客から回収したアンケートにおいて、他の芸人たちは「面白かった」などとネタそのものが評価されているにも関わらず、脳ブラに関しては「感動した」「障害者なのにすごい」といった「頑張る障害者」として評価する回答ばかりだったという。自分たちもプロの芸人として観客を笑わせようとしているにも関わらず、感動したという彼らの努力を否定するような意見に脳ブラの2人は不満を感じているという。そのとき、彼らのコントの多くには脳性マヒという自身の障害が題材として取り入れられているため、それが笑いではなく感動を生んでしまう原因であると考えたのだろう。脳ブラはそういったコントを演じることをやめ、障害を題材としていない新作コントを披露しているようだが、観客からは同じような反応しか返っ

てこないらしく、彼らの不満は解消されてはいない。

ここで生じている本質的な問題はどういったものなのだろうか。脳ブラのお笑い表現をそのまま鑑賞しない観客の受け取り方のほうに問題があるのだろうか。たしかに観客から寄せられる回答の多くに含まれている「感動した」という主旨のものは、「障害者は健常者と同じように振る舞うことができない」という政治的な判断によって生み出されたものだろう。こういった政治的事情があるにも関わらず、脳ブラの２人は自分たちのコントが笑いではなく感動を生み出してしまったとき、その問題点がコントの内容にあると考え、障害にまつわる要素をコントから取り除いたことは前述した通りである。だが、いくらコントそのものが障害や脳性マヒと無関係であっても、彼らが障害者であり脳性マヒであることは以前とは変わりない事実であり、はっきりと観客に伝わってしまうものである。なぜならば、障害者の振る舞いは当人にその意志がない場合にでも、健常者の目には政治性をもつものとして映るからだ。自分たちのお笑い表現をきちんと評価して欲しいという脳ブラの主張の裏に見え隠れしているのは、健常者と同じ条件で演じているのに、障害者としてしか評価されないことへの不満である。脳ブラはプロのお笑い芸人であり、健常者の芸人と同じ舞台で活躍していることは事実である。一方で、彼らが障害者であり、観客に健常者とは違うといった印象を持たれてしまうこともまた事実である。ならば、自分たちが持っている政治性というものを意識して、政治性に対する観客の反応を取り込んだお笑い表現を作らなければならないのではないか。

現在のコンビでコントをするというお笑い表現の形式を選択したのは脳ブラ自身による判断であり、当人たちが強く意識していなくとも、他者からの評価を得ようとする意図があったのではないだろうか。その評価というのは、お笑い表現として「面白かった」と言われることであり、それこそが脳ブラの目的であるかのように思われるが、実際にはそうではない。そのさらに深いところにある欲求は、お笑いとして評価されたいということではなく、健常者と同じように評価されたいというものである。この場合における平等はたんなる平等ではなく、「障害者だからこの程度までで

きていれば褒めるに値するだろう」という健常者の政治的な判断を打ち壊すという意義のある平等である。上と下という権力関係が平等になることは、徹底的な価値観の転覆とまでは言えないものの、かなり政治的作用のある振る舞いだと言える。

しかし、健常者から障害者へ働いている政治的作用はあまりにも強いため、権力関係をフラットにしただけではすぐに元通りに戻ってしまうことは想像に難くない。もし脳ブラがもっと徹底的に障害者と健常者の境界を消してしまおうとしていれば、結果は違っていたかもしれない。平等というヒューマニスト的立場をとってしまったがゆえに、権力関係を再生産するかのような皮肉な結果になってしまったのだ。こういったことが起こる原因に関して、ホーキングが著書の中で興味深い指摘をしている。そこで原因とされているのは、障害者を取り巻く人々とその人々が押し付ける価値観であるという。ホーキングによると、障害者のほとんどが通うことになる養護学校では障害者も健常者も同じだという意識が強く、「健常者のマネのようなこと」をさせられることが多いようだ。しかし、健常者のように身体が自由に動かない人が多いため、結局は全く異なる「マネのようなこと」になってしまうという。例えば、体育の授業において、多くの生徒がボールを投げたり走ったりすることができないために、野球をする場合はボールを転がして地面に置いたバットに当てたら手の届く範囲にあるベースに手を伸ばす、というおよそ野球とは呼べなくなるまでルールを変更していたという。この場合、障害が重く、身体能力が低ければ低いほど打率が高いというねじれた状況になっていたようだ。こういった過剰に押し進められる障害者と健常者は同じだという意識の押しつけのために、障害者は健常者に対して卑屈になってしまうという。[23] こういった事情から、脳ブラの 2 人も無意識下に健常者コンプレックスを抱えていたのではないかと思われる。その結果、彼らのお笑い表現にも平等というイデオロギーが入りこんでしまい、健常者の政治性を再生産してしまったために、笑いではなく感動を生むことになったのだろう。

だが、笑えないという評価はあくまでも健常者の政治的な視点によるも

のであり、それがすなわち彼らのお笑い表現の正当な評価というわけではない。脳ブラのお笑い表現は、たしかに観客を笑わせることに失敗することがあるものの、決してそれ自体で健常者のお笑い表現に劣るものではない。DAIGO の滑舌の悪さは、かえって観客の注意を台詞へと向けさせるという効果を引き起こすこともあるし、周佐のツッコミのタイミングなども笑いを生むための試行錯誤や練習の跡がうかがえるレベルの高いものである。観客も彼らのお笑い表現そのものに注目すれば、技術の高さに驚かされ、すぐさま笑ってしまうはずである。例えば、第 1 章でも挙げたコント「お医者さん」の中で、医者役の周佐は診察をする限り脳性マヒだと思われる患者役 DAIGO があくまでも自分は風邪であると主張するので、呆れつつも「その症状はいつごろからですか」と尋ねる場面がある。風邪と言っているのだから、せいぜい 1 週間くらいの期間を口にするだろうと観客が予想したところで、DAIGO は「子どものころから」と答える。この際に予想とは異なる展開に遭遇した観客は笑うだろうし、それに続く周佐の「やっぱりあなた脳性マヒです」というツッコミも展開として予想できるがゆえに、期待通りの展開に安堵することで精神エネルギーが節約されて笑いへと結びつくだろう。

　この短い例を見ただけでも、脳ブラのお笑い表現は決して笑いを生み出せないほど拙いものではないことがわかるはずだ。人によっては笑えないこともあるだろうが、目立つほどの割合で「感動した」という意見が見られるのは、やはり健常者の中に障害者を笑ってはいけないという政治的な態度が根強いからだろう。これは明らかに健常者の観客が正当な評価を下していないと言えるのではないだろうか。脳ブラはこういった現状に手を焼いており、健常者による偏見を払拭しようと試みているが、彼らとは反対にこの現状を利用しようとするものもいる。それが次節で扱う鳥居みゆきであり、簡潔に言うならば、彼女はまるで障害者と健常者の中間的存在として振る舞うことで、障害者のお笑い芸人にとって不利な状況を自身のお笑い表現に利用しているのだ。

鳥居みゆき

本節において取り扱う鳥居みゆきは、結論から言うならば、その政治性との距離に関して近さと遠さの間で揺れ動くようなキャラを演じているという希有な存在である。

彼女にはホーキングや脳ブラのように、一目見て分かるような身体障害はないものの、精神障害を抱えていると言われており、精神安定剤 4 種類を服用しているという情報もあるため、精神障害者のお笑い芸人と呼べるかもしれない。[24] しかし、鳥居自身や所属事務所などが鳥居が精神障害者であると明言しているわけではないし、そういった情報はゴシップ記事で語られている場合が多いため、信憑性も高くない。また、詳しくは後述するが、虚構と現実の境界線上で戯れているかのような鳥居の芸風からすると、精神障害であるという点も含めて彼女自身が創作したキャラ設定である、と考えるべきなのかもしれない。もし、彼女が実際に障害を抱えているわけではなく、精神障害者であるかのようなキャラを演じているだけだとすれば、本論で扱うのは適切ではないようにも思われる。しかし、本論の目的を考えれば、答えは否である。本論の主題の中にはお笑い表現にまつわる政治性というものがあるため、仮に彼女が障害者ではなかったとしても、障害者であるかのように振る舞ってお笑い表現を行なっているのであれば、その政治性も含めて考察する価値があるからだ。

それでは、鳥居みゆきのどういった面を取り扱っていくのかを簡単に説明しておこう。近年では単独ライブにおいてコントよりも演劇部分が長いこともある鳥居ではあるが、活動の初期は特に、所属事務所の定例ライブやテレビ番組において、数分で終わるような短いネタを行うことが多かった。このとき、彼女は真っ白な病人服を着て、包帯が巻かれた熊のぬいぐるみを持った姿で登場し、常に「まさこ」というキャラを演じていた。テレビやライブに出演する際には「まさこ」として出演することが多かったため、鳥居の演じている「まさこ」というキャラによる言動が鳥居本人のものだと勘違いされることもあるが、あくまでも「まさこ」は鳥居の演じるキャラの 1 つである。本節では、この「まさこ」というキャラを中心に

言及していくことにする。何故、鳥居本人ではなく、鳥居の演じるキャラに焦点を当てるのかというと、「まさこ」が精神障害者をデフォルメしたキャラであるからだ。

精神障害者をデフォルメしたキャラとはいったものの、具体的にはどういったものなのだろうか。先述したように、鳥居は「まさこ」を演じる際には必ず白い服を着て熊のぬいぐるみ持っているという特徴がある。これらにはきちんと意味があり、それぞれが「まさこ」が精神障害であることを記号的に示しているものである。例えば、彼女が着ている白くゆったりとした服は精神病棟の患者の服を意識したものだと指摘できるだろう。実際の精神病棟の患者がすべて「まさこ」のような服装をしているわけではないだろうが、鳥居は「まさこ」を創作するうえで小説やドラマなどフィクションにより形成されたイメージを反映することで虚構としてのリアリティを強調していると考えられるため、現実との整合性は大して問題とならない。この仮説はやや強引に聞こえるかもしれないが、他の「まさこ」が精神障害であることを示唆する要素と併せて考えると、決して強引なものではないことがわかるだろう。

さらなる例として、熊のぬいぐるみについて考えてみたい。「まさこ」が持ち歩いている熊のぬいぐるみは全身に包帯を巻かれているが、これは端的にいうならば、どこか悪いところがあるということを示唆するものである。さらにこの小道具が活かされているのは、鳥居が「まさこ」を演じているとき、たしかにそこにある熊のぬいぐるみに対して「見えないです」「そんなのありません」と言うところだろう。これは精神障害の症状の1つである幻覚を模した言動であると考えられる。また、鳥居は公式プロフィールなどの趣味の欄に「被害妄想」とも書いており、[25] これも精神障害の症状を意識したキャラ設定であると思われる。これらの要素は何かの偶然によって組み合わされたのではなく、鳥居の作為によって組み上げられたものである。そのことが最も端的に現れているのは、「まさこ」が連呼する「ヒットエンドラン」というフレーズである。普通、お笑い芸人がこういったフレーズを多用するのは、自身のキャラを売り出すためであり、

それは印象的であれば内容はともなわなくても構わないものである。しかし、「ヒットエンドラン」には十分に解釈する価値があるほどの意味が隠されているのだ。もともと「ヒットエンドラン」は野球用語であり、安打と走塁を同時に行うことを指している。これをヒントに「まさこ」の「ヒットエンドラン」を言い換えると、「ヒット」は「打つ」、「ラン」は「走る」となることがわかるだろう。さらにこれを解釈すると、「打つ」は「鬱」に、「走る」は漢字部分を音読みして「ソウ」すなわち「躁」となるため、全体としては「鬱と躁」という意味が隠されていたことがわかる。これは精神障害の症状の一面を描いているだけでなく、「まさこ」のコントの展開をも簡潔に表していること指摘しておかなければならない。「まさこ」はろれつの回らない喋り方でぼそぼそとコントを進行させていき、ある時点で突然「ヒットエンドラン」と叫びだすという定型を繰り返しているのだが、この「まさこ」の作中での精神状態の変化が「鬱と躁」に合致しているのだ。これらのことから、鳥居は外見的にわかりやすい記号を散りばめながら、お笑い表現の作中において、深読みすると気付く程度に精神障害を示唆する要素を取り込んで「まさこ」というキャラを作っているのがわかるだろう。

　こういった鳥居の振る舞いは、言うまでもなく政治的なものとして受け取られてしまう。鳥居のコントの主旨が精神障害者を馬鹿にすることではなかったとしても、彼女に対する批判が多く寄せられるであろうことは想像に難くない。鳥居の演じる「まさこ」の言動が、精神障害に対する理解を深めるようなものであれば話は別だったのかもしれないが、「まさこ」はあくまでも極端にデフォルメされたキャラであるため、大きな波紋を生んでしまうのだ。

　しかし、それこそが鳥居の政治的なねらいである。おそらく、彼女は精神障害に対する理解を深めようとか、精神障害に対して我々が考え直すきっかけを与えようといった、道徳的な動機から「まさこ」というキャラを創作したのではない。もし彼女が道徳的な理由から「まさこ」を演じているのであれば、実際には彼女自身が精神障害者でなくとも、自分には精

神障害への誤解を解消しようという政治的な意図があることを主張したり、もっとわかりやすく示したりするはずだ。

目に見えて健常者との違いがはっきりしている身体障害者と違い、精神障害者は見た目では判別がつかないことも多いため、身近に精神障害者がいなければ、精神障害に関するイメージは間接的にしか得られないものである。そういった場合、よく分からない存在は忌避の対象となり、やがては恐怖を抱く対象となる。鳥居はそういった世間に流布するネガティブなイメージをキャラに反映し、どこか怖くて何かをしでかしそうな「まさこ」を作り上げていったのだろう。ここにある鳥居の意図は、障害者の周囲にあるアンビバレントな政治性をお笑い表現に導入することではないだろうか。我々には、支援が必要となる障害者との距離を縮めなければならないという思いがある一方で、できるならば関わり合いたくないという思いもあるのではないだろうか。障害者という存在が周囲にいなければ、そういったマイノリティをどう理解すべきかわからずに、十把一絡げにしてしまうこともあるだろう。鳥居は健常者にそういった思いがあることを理解したうえで、見ている人がアンビバレントな感情の中で揺れ動くようなキャラとして「まさこ」を設定し、演じているのだ。

さらに鳥居が徹底しているのは、彼女自身が健常者なのか障害者なのかが分からないようなキャラを演じているところだろう。初期の鳥居は、いついかなるときも「まさこ」を演じており、テレビのバラエティ番組などにおけるコントとは無関係な会話の中でも「まさこ」として支離滅裂な言動を続け、彼女が演技しているのか、普段から「まさこ」のような人物なのかを限りなく曖昧にしながら振る舞っていた。それもそのはずで、ホーキングや脳ブラのように自身が障害者であると言ってしまえば、彼女の振る舞いはすべてメディアによって形成された障害者を取り巻く政治的な文脈に吸収されてしまい、脳ブラのような苦悩に陥らないとも限らない。鳥居はあくまでの健常者としてデフォルメした障害者を演じることで、そこに生じる政治性によって観客に判断を保留させた状態、すなわち宙づり状態にするのである。彼女が何故そういった宙づり状態を作り出そうとする

のかは､観客がそういった緊張状態から何かのきっかけで解放されたとき､笑いが生じることを考えればすぐさま理解されるだろう。鳥居は障害者と笑いという極めてデリケートで政治的な問題すらも、その政治性ゆえに笑いを生み出し損なうという危機をうまく避けながら、笑いを生み出す道具として使っているのだ。

また、鳥居は障害者問題を告発する健常者という立場をとるわけでもない。障害者にも健常者にもつかない鳥居みゆきという存在は、両者の区別の曖昧さや境界のなさを示唆しているのかもしれない。こういったアンビバレントさを取り入れている彼女のお笑い表現を通して、障害者と健常者の間にある区別が人工的なものであることを再認識するのだ。

結論

一口にお笑い表現といっても、報酬を得る、観客を笑わせる、政治的な主張をするなどの様々な側面があるうえに、それぞれがどれもが不可分に結びついているため、単純そうに見えるお笑い表現であっても複雑な構造になっていることが多い。障害者のお笑い表現に関して言えば、演者が意図する政治性と観客に解釈される政治性との両方が絡んでくるため、さらに複雑な構造になっている。もしこれを単一の視点から分析しようと試みれば、取りこぼしてしまう要素があまりにも多いため、有意な結果が生まれないことは容易に想像できることである。序論において障害者のお笑い表現に関する先行研究の少なさについて言及したが、その背景には有意な結果が生まれないであろうことへの諦めがあったのかもしれない｡しかし、そういった学術的好奇心が挫折させる要素以上に、障害者のお笑い表現は研究には値しないという政治的な判断があったからではないだろうか。アール・ブリュットなどの別の分野における先例があるものの、障害者の創作物は健常者のそれに劣るという意識が少なからずあったために、研究対象とされてこなかったのではないだろうか。あるいは、障害者の創作行為はリハビリテーションの一環であるという認識があったために、研究対

象に含めなくともよいという政治的な判断があったと考えることもできるだろう。

もちろん、笑いが政治的なものであり、それがどのように人に影響を及ぼすかという先行研究がないわけではない。社会心理学者であるマイケル・ビリッグ（Michael Billig）は著書『笑いと嘲り』[26] の中で、社会学者アーヴィング・ゴフマン（Erving Goffman）を引用しながら、笑いが他者に及ぼす影響、特にその教育的な側面を強調している。アンリ・ベルクソン（Henri Bergson）やフロイトが笑いの攻撃的な側面を取り上げていることを再評価しつつ、子どもが笑いを通して社会のルールを学ぶ事例を紹介しているこの著書の中で、ビリッグは一貫して笑いをレトリカル（rhetorical）なものとして提示している。レトリカルな笑い、修辞的な笑いとはどういうものか。噛み砕いて言うならば、人は何かをきっかけにして自然に笑うのではなく、何らかの意思表示として笑ったり、あるいは笑わなかったりするということである。政治性という言葉を用いているわけではないものの、権力関係の力学に自覚的であったビリッグは、笑いの政治性を指摘していると言えるのではないだろうか。

こういった研究自体は決して珍しいものではない。序論で述べた飯沢匡が指摘した狭義の笑いの政治性だけではなく、ビリッグが指摘した広義の笑いの政治性を指摘する研究も少なくないだろう。それにも関わらず、本論のような障害者のお笑い芸人に関する研究がほとんど見られないのは、やはり政治的な判断によるものだと考えるべきだろう。

ここで思い出さねばならないことがある。第 1 章でも述べたように、本論も理論に含まれる政治性とは無縁ではいられない存在である。理論に含まれる政治性に自覚的であるうえに政治性を論の主題にしているため、他の理論よりも強い政治性を持っているとさえ言えるかもしれない。

ここで我々が留意しておくべきことは、政治性そのものが悪い方向に働くものではないということだ。本論に含まれている政治性そのものは決して理論を歪めるものではないし、第 3 者が本論を参考にする際にもその政治性にさえ注意を払っていれば大勢に影響はないであろう。

とはいえ、そこに留意したところで、障害者のお笑い表現を分析するのが困難であることには変わりがない。本論はその一助となるだろうが、あらゆる問題を解決するような手段にはなりえないからだ。障害者のお笑い表現に向き合うとき、それにまとわりつく政治性の内容や性質が逐一異なるものであるため、個々の表現やお笑い芸人に寄り添いながら考察を進める必要がある。これは非常に骨の折れる作業であり、それを経て導き出された結果にも散々避けようとしてきた政治性が含まれているとなると、有意な結果が何も出ていない状態での堂々巡りのように感じてしまうかもしれない。しかし、理論の政治性を暴き立てるという本論の政治的な振る舞いによってしか、取り除くことのできないものもあることを忘れてはならない。障害者のお笑い表現という政治性をもったものは、政治的なアプローチでしか読み解くことができないのだ。

注

1　飯沢匡『武器としての笑い』岩波新書、1977 年

2　本橋哲也『カルチュラル・スタディーズへの招待』大修館書店、2002 年、38-39 頁

3　生瀬克己『障害者問題入門』解放出版社、1991 年、77-80 頁

4　同書、76 頁、99-100 頁

5　同書、177-178 頁

6　Edward Craig ed.,*Routledge Encyclopedia of PHILOSOPHY*, London and New Yoork:Routledge,1998,563.

7　そのコンビ名が表しているように、メンバーがともに脳性マヒを患っているという「歩けない」ほう周佐則雄と「うまくしゃべれない」ほう DAIGO によるお笑いコンビ。

8　ハーバート・スペンサー「笑いの生理学」『現代思想』（第 12 巻第 2 号）所収、木村洋二訳、青土社、1984 年、245-246 頁

9　ジークムント・フロイト「ユーモア」『フロイト著作集 第 3 巻 文化・芸術論』所収、高橋義孝訳、人文書院、1969 年、407 頁

10　イマヌエル・カント『判断力批判　上』宇都宮芳明訳、以文社、1994 年、389 頁

11 メアリ・ダグラス『汚穢と禁忌』塚本利明訳、ちくま学芸文庫、2009 年、302 頁
12 ホーキング青山『差別をしよう！』河出書房新社、2009 年、8-13 頁
13 同書、128 頁
14 同書、9 頁
15 乙武洋匡『五体不満足』（講談社、1998 年）のこと。500 万部の大ベストセラーとなった。
16 ホーキング、前掲書、17-18 頁
17 同書、38-39 頁
18 同書、80 頁
19 同書、90-91 頁
20 ここで筆者は、障害者のみが政治性を抱えていると主張しているわけではない。健常者が演じて健常者が鑑賞するお笑い表現に関して同様に政治性が生じるのだが、あまりにも些細なために見逃されてしまうことがほとんどである。
21 ホーキング、前掲書、38-39 頁
22 NHK 教育テレビ（現・E テレ）『きらっと生きる』2009 年 4 月 3 日放送
23 ホーキング、前掲書、107-118 頁
24 伊藤由華「お笑い芸人 豪快伝説 其の二十八『鳥居みゆき』」『リアルライブ』http://npn.co.jp/article/detail/92790529/（2012 年 12 月 12 日アクセス）
25 サンミュージックプロダクション「鳥居みゆき」http://www.sunmusic.org/profile/torii_miyuki.html（2012 年 12 月 12 日アクセス）
26 マイケル・ビリッグ『笑いと嘲り』鈴木聡志訳、新曜社、2011 年